七、子路從而後、遇丈人以杖荷蓧、子路問曰、子見夫子乎、丈人曰、四體不勤、五穀不分、孰爲夫子、植其杖而芸、子路拱而立、止子路宿、殺雞爲黍而食之、見其二子焉、明日子路行以告、子曰、隱者也、使子路反見之、至則行矣、子路曰、不仕無義、長幼之節、不可廢也、君臣之義、如之何其可廢也、欲潔其身而亂大倫、君子之仕也、行其義也、道之不行、已知之矣、

○蓧說文莜に作る、釋文云、一本條に作り又莜に作る、○漢石經植置に作り、芸耘に作る、

八、逸民伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連、子曰、不降其志、不辱其身、伯夷叔齊與、謂柳下惠少連、降志辱身矣、言中倫、行中慮、其斯而已矣、謂虞中夷逸、隱居放言、身中清、廢中權、我則異於是、無可無不可、

○其可廢也、唐石經其廢之に作る、○潔、唐石經絜に作る、○也、唐石經なし、○身、史記行に作り、廢鄭本發に作る、

故に天下を周遊して、これを治めむと欲するなり〕。

七、子路〔孔子に〕從ひて後れ、丈人（老人）の杖もて蓧を荷へるに遇へり。子路問ひて曰く、子、夫子を見しか。丈人曰く、四體勤めず、五穀分はず、孰ぞ夫子と爲さむと、其杖を植て芸る。子路拱して立つ。〔丈人〕子路を止めて宿せしめ、雞を殺し黍を爲りてこれを食はしめ、その二子を見えしむ。明日子路行きて以て〔孔子に〕告ぐ。子曰く、隱者なりと、子路をして反りて之を見せしむ。至れば則ちいで行たり。子路〔その二子に留言して〕曰く、〔汝の父の〕仕へざるは〔君臣の〕義を無するなり、〔然れども〕長幼の節廢つべからずんば、君臣の義も如何してかそれ廢つべけむや。〔汝の父は〕其身を潔くせむと欲して大倫を亂る、君子の仕ふるはその義を行はむとするなり、道の行はれざるは已に知れり、〔然れどもこれによつて君臣の義は廢つべからざるなり。〕

八、逸民は伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連。子曰く、其志を降さず其身を辱しめざるは伯夷・叔齊か。柳下惠・少連を謂る。志を降し身を辱しめたるも言は倫〔道理〕に中り行は慮（法度）に中る、それ斯のごときのみ。虞仲・夷逸を謂る、隱居して言を放き（世俗の事をいはず）、身（行）清に中り廢（發）けば權に中る。我は是

九、大師摯適齊、亞飯干適楚、三飯繚適蔡、四飯缺適秦、鼓方叔入于河、播鞀武入于漢、少師陽擊磬襄入于海、

○書序云、殷紂斷棄祖先之樂、廼作淫聲、用變亂正聲、樂官師瞽抱樂器而犇散、或適諸侯、或入河海、

○唐石經、鞀を瞽に作る、

一〇、周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不以、故舊無大故、則不棄也、毋求備於一人、

○釋文、施弛に作る、弛は棄忘也、廢也、

一一、周有八士、伯達、伯适、仲突、仲忽、叔夜、叔夏、季隨、季騧、

○唐石經棄を弃に作り、毋を無に作る、

らに異り、可もなく不可もなし。

九、〔殷紂祖先の樂をすて淫聲を作りて以て正聲を亂る〕大師摯は齊に適き、亞飯干は楚に適き、三飯繚は蔡に適き、四飯缺は秦に適き、鼓方叔は河に入り、播鼗武は漢に入り、少師陽と擊磬襄とは海に入れり。

一〇、周公魯公（伯禽）に謂りて曰く、君子その親を施（廢）てざれば、大臣をして以（用）ゐられざるを怨みしめず。故舊大故（惡逆）なければ則ち棄てざるなり。一人に備はらむことを求むるなかれ。

一一、周に八士あり、伯達・伯适・仲突・仲忽・叔夜・叔夏・季隨・季騧。

論語卷第十

論語子張第十九　何晏集解　凡二十五章

一、子張曰、士見危致命、見得思義、祭思敬、喪思哀、其可已矣、

二、子張曰、執德不弘、信道不篤、焉能爲有、焉能爲亡、

三、子夏之門人問交於子張、子張曰、子夏云何、對曰、子夏曰、可者與之、其不可者距之、子張曰、異乎吾所聞也、君子尊賢而容衆、嘉善而矜不能、我之大賢與、於人何所不容、我之不賢與、人將距我、如之何其距人也、

四、子夏曰、雖小道必有可觀者焉、致遠恐泥、是以君子不爲也、

○憲問第十三章見利思義、見危授命、

○この章道德理想を高くすべきを說く、小德は有無を論ずる價値もなしとなり、

○翟氏考異云、漢石經其字なし、

○唐石經、距拒に作る、

○之は若と同意に用ゐらるゝことあり、

論語子張第十九　凡二十五章

一、子張曰く、士、危きを見ては命を致げ、得を見ては義を思ひ、祭には敬を思ひ、喪には哀を思はば、それ可ならむ。

二、子張曰く、德を執ること弘（大）ならず、道を信ずる篤からずんば、焉ぞ能く有りとなさむ、焉ぞ能く亡しと爲さむ。

三、子夏の門人交を子張に問ふ。子張曰く、子夏は何といへる。對へて曰く、子夏は可なる者はこれに與り、不可なる者はこれを拒がむといへり。子張曰く、吾が聞ける所に異なり。君子は賢を尊びて衆を容れ、善を嘉みして不能を矜む、我之（若）大賢ならむか、人に於て何の容れられざる所かあらむ、我之不賢ならむか、人將に我を拒がむ、如何にしてかそれ人を拒がむ。

四、子夏曰く、小道と雖も必ず觀るべきものあり、〔然れども〕遠きを致めむとすれば泥まむことを恐る、是を以て君子は爲さざるなり。

五、子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、可謂好學也已矣、

六、子夏曰、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣、

七、子夏曰、百工居肆以成其事、君子學以致其道、

八、子夏曰、小人之過也必文、

九、子夏曰、君子有三變、望之儼然、卽之也溫、聽其言也厲、

一〇、子夏曰、君子信而後勞其民、未信則以爲厲己也、信而後諫、未信則以爲謗己矣、

○矣、唐石經也に作る、

一一、子夏曰、大德不踰閑、小德出入可也、

一二、子游曰、子夏之門人小子、當洒掃應對進退則可矣、抑末也、本之則無、如之何、子夏聞之曰、噫、言游過矣、君子之道、孰先傳焉、孰後倦焉、譬諸草木區以別矣、君子之道、焉可誣也、有始有卒者、其唯聖人乎、

○釋文、洒は正しくは灑に作るべし、掃、唐石經埽に作る、

五、子夏曰く、日にその亡き所を知らむとし、月にその能くする所を忘るる無からむとするは學を好むといふべし。

六、子夏曰く、博く學びて篤く志（識）り、切に問ひて近く思はば、仁はその中にあらむ。

七、子夏曰く、百工は肆に居て以てその事を成す、君子は學びて以てその道を致む。

八、子夏曰く、小人の過つときは必ず文る。

九、子夏曰く、君子に三變あり、これを望めば儼然たり、之に卽けば溫かし、その言をきけば厲し。

一〇、子夏曰く、君子は信ぜられて後其民を勞す、未だ信ぜられざるときは則ち以て己を厲ましむと爲せばなり。信ぜられて後諫む、未だ信ぜられざれば則ち以て己を謗ると爲せばなり。

一一、子夏曰く、大德は閑（法）を踰えず、小德は〔或は法を〕出で、〔或は法に〕入るも〔猶〕可なり。

一二、子游曰く、子夏の門人小子、洒掃應對進退に當つては則ち可なり。抑ども末なり、本は則ちなし、如何すべき。子夏これを聞いて曰く、噫、言游過てり、君子の道孰をか先に傳へ、孰れをか後に倦へむ、これを草木の區にして別るるに譬ふべし、君子の道

一三、子夏曰、仕而優則學、學而優則仕、

一四、子游曰、喪致乎哀而止、

一五、子游曰、吾友張也爲難能也、然而未仁、

一六、曾子曰、堂堂乎張也、難與竝爲仁矣、

一七、曾子曰、吾聞諸夫子、人未有自致也者、必也親喪乎、

一八、曾子曰、吾聞諸夫子、孟莊子之孝也、其他可能也、其不改父之臣與父之政、是難也。

一九、孟子使陽膚爲士師、問於曾子、曾子曰、上失其道、民散久矣、如得其情、則哀矜而勿喜、

二〇、子貢曰、紂之不善、不如是之甚也、是以君子惡居下流、天下之惡皆歸焉、

二一、子貢曰、君子之過也、如日月之蝕焉、過也人皆見之、更也人皆仰之、

○也者唐石經者也に作る、漢石經也者此本に同じ、

○唐石經難下能の字あり、

○散とは法を犯す意、情は實と同じ犯罪の實を得るなり、

○矜唐石經矜に作る矜はおごる意矜は憐む意此本矜に作る義長ず、漢石經も亦矜に作る、

○蝕唐石經食に作る、

焉ぞ誣（同）くすべけむや。始あり卒あるものはそれ唯聖人か。

一三、子夏曰く、仕へて優なれば則ち學び、學びて優なれば則ち仕ふ。

一四、子游曰く、喪は哀を致すのみ。

一五、子游曰く、吾友、張は能くしがたきをなす、然れども未だ仁ならず。

一六、曾子曰く、堂堂たるかな張や、與に竝びて仁をなし難し。

一七、曾子曰く、吾これを夫子に聞く、人未だ自ら致すものあらず、〔自ら致すものは〕必ず親の喪かと。

一八、曾子曰く、吾これを夫子に聞けり、孟莊子の孝や、その他は能くすべきも、その父の臣と父の政とを改めざるは是れ能くし難きなり。

一九、孟氏、陽膚をして士師たらしむ、〔陽膚〕曾子に問ふ、曾子曰く、上その道を失ひ民散（犯法）こと久し、〔汝士師となりて〕如しその情（實）を得とも、則ち哀矜みて喜ぶこと勿れ。

二〇、子貢曰く、紂の不善も、是の如く甚しきにはあらざるなり。是を以て君子は下流に居ることを惡む、〔蓋し下流に居れば〕天下の惡皆これに歸すればなり。

二一、子貢曰く、君子の過つは日月の食（蝕）するが如し、過つときは人皆これを見、更た

二二、衛公孫朝問於子貢曰、仲尼焉學、子貢曰、文武之道、未墜於地、在人、賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道焉、夫子焉不學、而亦何常師之有、

二三、叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼、子服景伯以告子貢、子貢曰、譬諸宮牆𠙵、賜之牆也及肩、闚見室家之好、夫子之牆也數仞、不得其門而入圈、不見宗廟之美百官之富、得其門者或寡矣、夫子之云、不亦宜乎、

○諸、唐石經之に作る、
○闚邢本窺、釋文此本に同じ、

二四、叔孫武叔毀仲尼、子貢曰、無以爲也、仲尼不可毀也、他人之賢者丘陵也、猶可踰也、仲尼𠙵日月也、𠙵無得而踰焉、人雖欲自絕𠙵、其何傷於日月乎、多見其不知量也、

二五、陳子禽謂子貢曰、子爲恭也、仲尼豈賢於子乎、子貢曰、君子一言以爲智、一言以爲不智、言不可不愼也、夫子之不可及、猶天之不可階而升也、夫子得邦家者、所謂立之斯立、導之斯行、綏之斯來、

○唐石經、智知に作り、及下也の字あり、夫子の下之の字あり、導道に作る、

むるときは人皆これを仰ぐ。

二二、衛の公孫朝、子貢に問ひて曰く、仲尼は焉にか學びたる。子貢曰く、文武の道未だ地に墜ちずして人にあり、賢者はその大なるものを識り、不賢者はその小なるものを識るも文武の道あらざるなし、夫子焉ぞ學ばざらむ、而して亦何の常師かこれあらむ。

二三、叔孫武叔、大夫に朝に語りて曰く、子貢は仲尼より賢れりと。子服景伯以て子貢に告ぐ、子貢曰く、これを宮牆に譬ふれば、賜の牆は肩に及ぶのみにして室家の好を窺ひ見るべし、夫子の牆は數仞にして其門を得て入らざれば宗廟の美と百官の富を見ず、その門を得る者或は寡し、夫子（叔孫武叔）の云へるも亦宜ならずや。

二四、叔孫武叔、仲尼を毀る、子貢曰く、以て爲ることなかれ、仲尼は毀るべからず、他人の賢者は丘陵なり、猶踰ゆべし、仲尼は日月なり、得て踰ゆるなし、人自ら絕（棄）てむと欲すと雖ども、それ何ぞ日月を傷らむ、多（適）その量を知らざるなり。

二五、陳子禽、子貢に謂て曰く、子〔仲尼を譽むるは〕恭と爲すべし、〔然れども〕仲尼豈に子より賢らむや、子貢曰く、君子は一言以て知（智）となし一言以て不知（智）となす、〔故に〕言は愼まざるべからざるなり。夫子の及ぶべからざるは猶天の階てゝ升るべからざるがごときなり。夫子の邦家を得むときは、所謂立てむとすれば斯ち立ち、

動之斯和、其生也榮、其死也哀、如之何其可及也、

論語堯曰第二十

何晏集解　舊三章今分爲八章

一、堯曰、咨爾舜、天之曆數在爾躬、允執其中、四海困窮、天祿永終、
舜亦以命禹、

二、曰、予小子履、敢用玄牡、敢昭告于皇皇后帝、有罪不敢赦、帝臣
不蔽、簡在帝心、朕躬有罪、無以万方、万方有罪、在朕躬、

○唐石經万萬に作り、在上罪の字あり、

三、周有大賚、善人是富、

四、雖有周親、不如仁人、百姓有過、在予一人、

五、謹權量、審法度、修廢官、四方之政行焉、興滅國、繼絶世、擧逸民、

導かむとすれば斯ち行き、綏ずれば斯ち來き、動かせば斯ち和らぎ、其生ずるや〔人〕榮〔樂〕しみ、其死するや〔人〕哀む、如之何それ及ぶべけむや。

論語堯曰第二十

舊三章、今分けて八章となす

一、堯曰く、咨爾舜よ、天の曆數（順次）は爾の躬（身）にあり、允に其中を執りて四海に困窮らば天祿永に終（繼）かむと。舜も亦〔此語を〕以て禹に命ぜり。

二、〔湯〕曰く、予、小子履、敢て玄牡を用て、敢て昭に皇皇后帝に告ぐ、罪あるものは敢て赦したまはじ、帝臣蔽ず簡ぶこと帝の心にあり、朕躬罪あるも萬方に以（及）すこと無れ、萬方罪あらば、罪は朕躬にあらしめ給へ。

三、周に大なる賚（賜）あり、善人是れ富めり。

四、〔武王殷に克ち、仁人呂尙を齊に封じて曰く〕、周親（至親）ありと雖も仁人に如かず、百姓過あらば、予一人にあれと。

五、〔孔子曰く〕、權量を謹しみ、法度を審かにし、廢官を修むれば、四方の政行はれむ。

天下之民歸心焉、所重民食喪祭、

六、寛則得衆、敏則有功、公則悅。

七、子張問政於孔子、曰、何如斯可以從政矣、子曰尊五美屏四惡、斯可以從政矣、子張曰、何謂五美、子曰、君子惠而不費、勞而不怨、欲而不貪、泰而不驕、威而不猛、子張曰、何謂惠而不費、子曰、因民之所利而利之、斯不亦惠而不費乎、擇因可勞而勞之、又誰怨、欲仁而得仁、又焉貪、君子無衆寡、無小大、無敢慢、斯不亦泰而不驕乎、君子正其衣冠、尊其瞻視儼然、人望而畏之、斯不亦威而不猛乎、子張曰、何謂四惡、子曰不教而殺、謂之虐、不戒視成、謂之暴、慢令致期、謂之賊、猶之與人也、出内之吝、謂之有司、

○唐石經衆下、信則民任焉の一句あり、漢石經なし、此本と同じ、豐嶋豐洲云、此句又陽貨篇子張問仁章に見ゆ、彼章によれば公の字は恐らく惠の字の壞れたるもの、翟灝云、陽貨篇子張問仁章、此篇子張問政章と文勢畫一、一手に出づるが如し、疑らくは子張問仁章、舊本此處にあつて、今僅かにその殘簡を存するか、

○致期とは怠慢にして期限のつくるをいふ、

○猶は遒の假借あつむる意、

滅國を興し、絶世を繼ぎ、逸民を擧ぐれば、天下の民、心を歸せむ。重んずる所は民の食と喪祭となり。

六、寛なれば衆を得、信あれば民任じ、敏なれば則ち功あり、惠なれば則ち民説ぶ。

七、子張政を孔子に問ひて曰く、何如ば斯ち以て政に從ふべき。子曰く、五美に尊（遵）ひ四惡を屏（除）けば斯ち以て政に從ふべし。子張曰く、何をか五美といふ。子曰く、君子は惠めども費さず、勞すれども怨みず、欲すれども貪らず、泰なれども驕らず、威あれども猛からず。子張曰く、何をか惠めども費さずといふ。子曰く、民の利とする所によりてこれを利す、斯ち亦惠めども費さざるにあらずや。その勞すべきを擇びてこれを勞す、又誰をか怨みむ。仁を欲して仁を得たり、又焉ぞ貪らむ。君子は衆寡となく、小大となく、敢て慢ることなし、斯ち亦泰なれども驕らざるにあらずや。君子はその衣冠を正し、その瞻視を尊くして儼然たり、人望んでこれを畏る、斯ち亦威あれども猛からざるにあらずや。子張曰く、何をか四惡といふ。子曰く教へずして殺す、これを虐といふ。戒めずして成るを視る、これを暴といふ。令を慢り期を致す、これを賊といふ。之を猶（聚）は人に與へむとてなり、而も出内ことの吝なる、これを有司（屬吏）といふ。

八、孔子曰、不知命、無以爲君子也、不知禮、無以立也、不知言、無以知人也、

八、孔子曰く、命を知らざれば、以て君子たることなし。禮を知らざれば、以て立つことなし。言を知らざれば、以て人を知ることなし。

解題

武内義雄

一　孔子の生涯と論語

孔子は名は丘、字は仲尼、周の靈王の二十年（西紀前五五二）に魯の昌平鄉卽ち今の山東省曲阜の地に生れ、敬王の四十一年（西紀四七九）歲七十四で歿した。その事蹟は史記孔子世家に記され、その言葉は論語の中にあつめられてゐる。史記の孔子世家は前漢の史家司馬遷によつてかゝれたもので、孔子傳記の中で尤も古く且つ信用されてゐるものであるが、それでも時に疑問があつて後世の學者の議論の的となつてゐる點が少くない。そこで私は本書論語の爲政篇にのせられた孔子自身の言葉によつてその一生を髣髴することとする。

吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に從つて矩を踰えず。（二四・二五頁）

これは孔子が晩年に至つて自分の一生涯を回顧して語つた言葉で、孔子の經歷を知るに最も確かな資料である。さてこのうちで孔子は十年毎に自己の修養の進歩したことをのべてゐる

が、その中劃期的の事項をあげると、「十五にして學に志し」、「三十にして立ち」、「五十にして天命を知つた」といふ三項に歸する。卽ち十五から三十までは孔子の學問修養の時代であるが、三十以後は實社會に活動した時代である。孔子は三十にして世に立つたといはれるがそれは如何なる地位であつたらうか。史記の孔子世家はこれを說明して、「孔子長ずるに及びて、嘗て委吏と爲る、料量平かなり。嘗て司職の吏と爲る、而して畜蕃息せり」といつてゐる。こゝに委吏といふのは穀物の倉庫を主る役人で、司職の吏といふのは家畜を主る役人である。孔子も最初は委司や司職の吏のやうなつまらぬ役をつとめたが、然しその職務に對して忠實で、ために穀物の出入が平均を得、牧羊は蕃息したといはれてゐる。孔子はその後進んで中都の宰となり、魯の司空となり、大司寇と爲つて政治舞臺に立つこととなつたが、その後ほどなく、魯國の政治から離れて諸國を遊說することとなつた。はじめて遊說に出た時は年五十六だといふから「五十にして天命を知つた」後間もない時のことである。天命とは天から人間に賦與せられた道德性を意味するのであつて、孔子は年五十にして人間には先天的に賦與せられてゐる德性があつてこれを發揮完成することが人間の究極目的であることを悟つたのである。それで孔子は先づ魯に於てその目的を達成し得るやうな政治を施さうと願つたが、當時魯では陪臣三桓子が權力を專らにしてゐて孔子の理想は行はれさうにもなかつた。そこで翻然魯國を去つて衞に赴き、次で陳・曹・宋・鄭・蔡・葉・楚の諸國を遊說したが、これ亦その理想を行ひ得ないことをさとり、遂にその鄕里にかへつて、門人の教育に專念することと成つた。孔子の教へをうけた門人は甚だ數多くその名の知れてゐる人だけでも七十餘人の多きに及んでゐる。此等門弟子の略歷は史記の仲尼弟子列傳の中に敍せられてゐる。さうしてこれらの門弟子と孔子との問答が論語の中に記されてゐる。

二　禮の傳承

孔子は魯國の人で、魯は今の山東省の西南部にあたり、周の初に周公の子伯禽が封ぜられた國である。そこで魯國に生れた孔子がその建國の祖の親にあたる周公を敬慕するやうに成つたのは寧ろ當然である。周公は周初の偉大な政治家で燦然たる禮制と八百年の泰平とは皆この人の企畫經營に成つたものである。然るに孔子の當時は禮制は崩壞して諸侯はたゞ自國を富まして他國を蠶食することをのみつとめて居た。この現實を見た孔子は、何とかして今一度周の禮を復興して昔にかへしたいものだと考へ、常に周公を理想として夢寐の間にも忘れ得なかつた。この心持は論語の次の一章がよくこれを示してゐる。

子曰く、甚しいかな吾の衰へたる、久しいかな、吾復夢に周公を見ざること。（述而、六

八・六九頁）

したがつて孔子の目的は周の禮を復興して周公の理想を實現することにあるといふことができる。

それでは禮とは如何なるものであらうか。禮の字を分析すると示と豐とに分れるが、示は神を意味し、豐は豆（神に物を供へる器）の上に供物を載せた形であるから、禮の字の最初の意味は神を祭る儀式といふ義であつたらうが、それが一轉して人間交際の禮儀作法といふやうな意味となる。この様な禮儀作法は人間が社會生活を營む間に自然に生じて來た善風美俗であるが、それが爲政者によつて修正せられるとこれに法的な要素が加はる。さうしてそれが更に進むと禮と法とが分化して禮は法に對立するものと考へられるやうに成るが、孔子の所謂禮は未だ法の分化しない前のものである。

史記の孔子世家によると、孔子は幼時遊びをするのにも俎豆をならべて禮の稽古をしたといはれてゐるが、それが事實であつたか否かは別問題として、孔子が禮に對する關心の深かつたことだけは充分に推察できる。さうして論語によると孔子は夏の禮を研究しようとして、その後裔にあたる杞國を調査し、又殷の禮を明かにしようとしてその子孫の國宋をしらべたが、雙方とも文獻が足りないためにその目的を果し得なかつた（八佾、三四・三五頁）。しかし夏・殷二代の禮を損益して制定された周の禮は郁々乎として完備したものであるから自分は周の禮に從ひたいといつて居るが（八佾、三六・三七頁）、こゝに郁々乎として備はれる周の禮は卽ち周公の制定に本づくもので、その復興を志した點からいへば孔子は全く周公の祖述者である。

三　新しい精神―孔子の敎の特徵

しかし禮は形式的のしきたりで時勢の推移するにつれて變更を要するものであることはいふまでもない。現に孔子の當時周の禮は既に時代遲れとなつて一般から重んぜられなくなり、その僅かに殘つてゐるものも亦その制定當時の精神が忘れられて形骸をのこしてゐるにすぎないやうな狀態にあつた。そこで孔子は禮の形式を保存しようとつとめると同時に、これに新しい精神を與へようとした。こゝに孔子の敎の特徵がある。

仁　道

孔子によつて附與せられた新しい精神とは何であるか、それは仁の一字である。仁とは「人」の字と「二」の字とを組み合せて作られた文字で人と人とが互に相親しみあつて平和な社會生活を送ることを意味する。一體禮は人間の社會生活を圓滑ならしめるために生れた

習俗であるから、昔から「禮は和を以て貴しとする」といはれてゐた。然るに孔子は「和」の字に代ふるに「仁」の字を以てした。こゝに禮の精神が相互の調和から相互の親愛へと入れ換へられたのである。調和と親愛とは一見たいした相違もないやうに考へられるかも知れないが、實はこゝに大きな進歩のあることを注意しなければならぬ。即ち單に調和といへばそれが眞心から出たものであつても打算的に妥協されたものであつても調和であり得るが、仁には分毫の打算も許さない、たゞそれは人間の道德性から浸み出たものでなければならぬ、こゝが「和」と「仁」との大きな相違點である。

孔子は「五十にして天命を知つた」といつてゐるが、所謂「天命」とは天が人間にかくあるべしと命令したところのもので、人からいへば人間が天から享受した德を意味する。德とは得の意で享受したものをいふ。從つて孔子が「天命を知つた」といつた言葉は、他の語でいへば「人間の德が何であるかを悟つた」といふことになる。さうして論語全體を通覽すると、孔子は人間の德を知と仁の二つと考へてゐるらしい。知とは是非善惡を判斷する知的作用で、仁とは他人を愛する情的の作用である。人間の精神活動はこの知と仁との兩面からなつてゐるが、この兩面は各獨立して存するものでなく互に密接な關係に立つてゐる。そこで論語の中には「仁を好みて學を好まざれば、その蔽は愚なり」（陽貨、一八四・一八五頁）といつて、仁を全くするためには學問によつて知をみがく必要のあることを說いてゐるが、また「知はこれに及ぶも、仁もてこれを守る能はざれば、これを得といへども必ずこれを失ふ」（衞靈公、一六六・一六七頁）といつて知も亦仁によらなければ知たる所以を全くし得ないことを說いてゐる。この樣に仁と知とは密接な關係にある德であるから、仁といへば必ずその裏には知が伏在して居り、知といへば必ずその半面に仁が動いてゐる、兩者は畢竟一つの精神活動の兩面である。そこで孔子は之を總括して仁と呼んだ。即ち天から與へられた人間の德性は仁で、この德性を發揮し完成することが人間の道德である。禮の精神目的も畢竟するにこの仁德を發揚する以外に存するものでない。そこで孔子は「己を克めて禮に復へるを仁となす」（顏淵、一一六・一一七頁）といひ、又「人にして仁あらずんば禮を如何せん」（八佾、三二・三三頁）ともいつてゐる。これらによつて考へると、孔子は表面的には周公の制定にかゝる禮制の復興を志したのであるが、精神的には人間天賦の仁德を發揮して人と人とが互に相親しみ相愛して平和に社會生活を營み得るやうにしようと志したものだといひ得るであらう。孔子の所謂仁道は即ちこれをいふのである。

孝悌と忠恕

それでは仁道を實現させるには如何にすればよいか。これには凡そ二つの方法が考へられ

る。前にものべた通り仁の本質は親愛の情であつて、その最も熾烈で純眞なものは父子の愛情であり、兄弟の友情である。この點からいへば仁の實行は先づ父子兄弟の間から始められるべきである。孔子の弟子有若が「君子は本をつとむ、本立ちて道生る、孝弟はそれ仁の本か」(學而、一八・一九頁)といつたのは卽ちその意味である。さうして父子兄弟間の親愛の情がひろく推しひろめられて社會全般に及ぶとき、仁道は完成されたといつてよい。卽ち國家社會の精神も亦孝悌を出るものでない。そこで孔子は尙書の逸文に「孝なるかなこれ孝、兄弟に友あれ」とあるのを引いて孝友の道が完全に行はれるならば國家のためによい政治をしたと同じ效果だと賞讃して居る(爲政、二八・二九頁)。そこで家庭內に於いて父母に孝をつくし兄弟仲よく暮すことからはじめて、同じ心持を廣く國家社會にまで推し及ぼすことが仁道の實行方法の一つである。

ところで仁は決して外からかりて來たものでなく、我々人間が生れると同時に天から賦與された固有の德であるから、之を他に求める必要はなく己自身の內に求むべきである。「仁を爲す己による、あに人によらんや」(顏淵、一一六・一一七頁)とはこの意をいつたのである。かつて孔子が門弟子等と話合つて居た際特に曾子を呼び出して、曾參よ、吾が道はたゞ一つのことを行ふだけであるが、汝はこれを知つて居るかと尋ねたことがある。曾子は素直にハ

イと答へた。孔子がその座を退いた後、門弟子等は曾子に對し先刻の話は何の意味かと問ふと、曾子は夫子の道は忠恕のみと答へた(里仁、四二・四三頁)といふ。こゝに忠恕が仁道を實行する唯一の方法だと說明されてゐる。忠とは中と心との二字をくみ合せた文字で、自ら內省して欺かず良心の命ずるまゝに從ふ意であり、恕とは如と心とを組み合せて作られた文字で、己の欲するところを人に施し己の惡むところを人に加へない意である。而して恕が行はれる前提として先づ忠が行はれなければならない。そこで忠恕とはいふものの根本に遡ると忠の一字である。忠とは自己の心を內省して何が道德的であるかを直覺することで、これが仁を行ふ第二の方法である。

從つて孔子によると仁道とは先づ自己を內省して道德を直覺すること、次ぎに家庭內に於いて父母に孝をつくし兄弟の友情を厚くし、この心持を廣く國家社會に推し及ぼして社會全體が相親しみ相愛して平和な生活を營むことである。

四　儒敎の成立

孔子の立敎は形式的には周禮の復興を志し精神的には仁道を提唱したもので、所謂仁道とは天から賦命せられた人間固有の仁德に本づく道であるから、その實現には先づ自己を內省

して忠であることが第一要件となり、次に自己内省によつて直覺せられた父子の愛、兄弟の友情から出發して社會全體の和親を計ることを實行の要諦とするものである。これは孔子立教の精神であるが、孔子はこの精神を以て多くの門弟子を教育して儒教の開始者となつた。論語述而篇によると孔子は文・行・忠・信の四つを以て門弟子を教へた（七二・七三頁）といふから、こゝにこの四つを説明して孔門教育の梗概を窺はう。

第一の文とは儒教の經典である。後世の儒者は易・書・詩・禮・樂・春秋の六つを六經と呼んで尊崇してゐるが、孔子の當時禮樂はたゞ事實として行はれて居て文獻には成つて居なかつたらしく、また春秋は孔子の著述として孟子以後の儒家に重んぜられて居るが、孔子自身が自作の書を經典とする筈もない。さうして論語述而篇には「加我數年五十以學易可以無大過矣」とあつて、後世の學者はこれを「われに數年を加へ、五十にして以て易を學ばゝ大過なかるべし」と讀んで孔子が晩年易を愛讀して韋編三絶するに至つたといふが、論語此章の「易」の字は魯論といふ古い本には「亦」と同じで「五十にして學ぶも、亦大過なかるべし」とよまれてゐるからこれを以て孔子が易を尊重した證據とすることはできない（七二・七三頁參照）。從つて孔子が經典として引用した本はたゞ書と詩の二つだけである。禮・樂・春秋・易などが儒教の經典になるのは後世のことで孔子はたゞ詩と書との二つによつて門弟

を教へたのである。詩とは古代の民謠又は詩人の佳作をあつめたもので、書とは古代の聖帝の詔勅訓戒の類をあつめたもので、孔子は詩と書とによつて、古聖賢の精神を説いたのである。

第二の行とは孝悌の行をいふ。論語學而篇に

子曰く、弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟（悌）、謹みて信あり、汎く衆を愛して仁に親しみ、行餘力あれば則ち以て文を學べ。（一八・一九頁）

とある一章に於いて、行の字が文の字を對照して使はれてゐるが、こゝに所謂行は上の孝悌をさすことは明瞭で、四教の行も恐らく孝悌をさすのであらう。

第三の忠と第四の信とはともにマコトと訓まれる文字であるが、その意は同じでない。この二つの文字の意味は

曾子曰く、吾日に三たび吾身を省みる、人のために謀りて忠ならざるか、朋友と交りて信あらざるか。（學而、一八・一九頁）

の一章に於いて明瞭に察知することができる。卽ち忠は自己の心に謀りて欺かない意であり、信は人の字と言の字とを組み合せた文字で他人に約束した言をたがへぬ意である。前者は主觀を内省して如何にすることが道德的であるかを直覺することであり、後者は他人に對して

如何にあるべきかを教へたものである。兩者はその向ふ所を異にするが、いづれも「マコト」と訓まれて僞らぬこと欺かぬことを教へてゐる點は同じである。畢竟マコトの精神が內に向つて動くときは忠であり、外に向つて働くときは信である。そこで論語の中には忠信の二字が屢〻連用されてゐる。

之を要するに書と詩とは孔門の經典である。さうして前者は堯舜以來の典謨誓誥をあつめたものとされてゐるが、その中心をなすものは周公の誥であつて、この中には孝友の二德が重んぜられてゐる。想ふに孔子が孝悌を仁の根本だと考へたのは恐らくこれに本づくものであらう。次に詩は三百五篇から成り立つてゐるが盡く上代の詩人の心に映じたところを僞らず告白した歌である、そこで孔子は「詩三百、一言もつて之をさだむれば思邪なし」(爲政、二四・二五頁)と評してゐる。從つて孔子は詩によつて忠信の情操を養はしめようとしたものらしい。從つて孔門の教育は詩・書によつて忠信の德を養ひ孝悌の行をつとめしめて仁道を達成せしめようとしたものである。

要するに孔子の教卽ち仁道は自己を內省して道德を直覺することであり、實踐的には孝悌の行をはげんで、これを社會全般に及すことであつた。後者の面からは、孔子の仁をその實踐の第一歩に着目して、これを孝と規定し、人倫道德の全體が、孝道の展開として考へ得られることを說いた人に孔子の門弟曾子がある。子思は更らにこれを繼承して道德の本質を、形式的に兩端の中、過不及なきところ「中庸」に置く說を强調した。孟子の性善說はこの系統から出て、さきの自己內省の面を深めたものと言ふべきである。

或は次の如くに考へてもよいであらう。大まかに言へば孔子の仁道の實踐は精神的には忠恕により、形式的には禮に服從することによつて達せられるものであつた。忠恕は人間に先天的に具はつてゐる德性にめざめしめる內省の道であり、禮に從ふことは、形式的に、人倫社會の規矩によつて、行爲を是正する方法である。孔子は常に忠恕と復禮との兩面から門人を教へた。曾子は夫子の道は忠恕だといつてゐる、これに對して顏淵は、克己復禮を仁だと考へてゐることは旣に述べた。孟子の性善說とは畢竟人間に仁義禮智の四德が潛在してゐて、これあるがため忠恕が仁道實踐の方法となり得ることを論證し、忠恕說に哲學的な基礎を與へんとしたものである。これに反し復禮說を繼承した荀子は禮を尊ぶあまり性惡說を唱へて孟子に反對してゐるが、孔子に於ては復禮と忠恕とが相待つて仁道完成の方法とされてゐたのであつた。

再刊に際して

本書はかつて岩波文庫の一册として世に行はれたものであつたが、今度筑摩叢書に加へられるにあたり、新たに論語を中心に孔子の生涯とその思想を概説する一文を附し、又、全文に嚴密な校正を加へ出來うるだけ活字の誤を少くした。

顧りみると、私が中國哲學の研究に專心して以來、既に六十年に近い歳月を經てゐる。その間、私の攻究はその努力の多くを論語にそゝいで來た。この書は、その様な私の研究の結果に基づいて、私としてはあたふる限り、論語のテキストを完全なものにし、これに譯讀をこゝろみたものである。譯讀ははしがきにも述べた如く、註釋を用ひずに、それだけで意味が諒解しうるようにと努めたものであるが、論語の様な古典を理解するためには、讀者に何程かの努力と精神の集注を期待せねばならないことは當然である。はじめて論語をよまれる若い方々には、多少骨が折れるかもしれない。しかし論語の最初の言葉が讀者諸氏をも、私をも、力づけるであらう。老齡の私は、この書を通じて、有朋の遠くより來るを、心の樂し

みとして待つこととしよう。

昭和卅八年八月

武内義雄

武内義雄（たけうち　よしお）

1886年，三重縣に生れる
1910年，京都大學支那哲學科卒
　東北大學名譽教授
　文學博士
著書――「論語の研究」「老子原始」「諸子概説」など。

論　語　　筑摩叢書 11

昭和38年10月25日發行

¥ 380

著　者　武内義雄
發行者　古田晁
印刷者　田中昭三
發行所　株式會社 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町2の8
電話　東京(291) 7651番(代表)
振替　東京4123番

© 1963

理想社印刷・九段製本

6 千利休

唐木順三

秀吉によつて切腹を命ぜられ悲劇的最後をとげた利休は、いまなお日本の生活や文化のなかで大きな比重をもつて生きている。本書は利休の生涯を、世阿弥、芭蕉のそれと比較し、権力者たる信長、秀吉と結びついた利休芸術の真諦を追究した、すぐれた芸術論であり、日本文化論である。 ¥三二〇

7 大正文学史

臼井吉見

多端な大正期の社会思潮的な推移を克明に捉え、その分析と論究のうえにたつて、成熟期にある明治の作家と、新たに登場する大正の作家、さらには昭和期へと続く作家らの多様な活動と性格を鮮かに裁断しつつ、この期文学の史的再評価と整理をおこなつた労作。口絵・年表・索引を付す。¥三八〇

8 わが心の遍歴

長與善郎

名門長与家の歴史を主軸に、古き時代の上流階級の生活を活写しながら、『白樺』以来の豊かな文学生活を通ずる、多くの先輩友人知己との思想的文学的な交流を回顧し、自らの成長の軌跡と、魂の遍歴をくもりない筆致にたくして赤裸に語つた一千枚におよぶ自伝文学の傑作。解説安倍能成。¥四五〇

モンテーニュ・エセー

原二郎訳

なにものにもとらわれず、柔軟自在な眼で自己を直視し、普遍的人間性を洞察して近代批評精神の先駆的存在となつた、十六世紀フランスモラリストの名著。ぼう大な《エセー》を精選して、一巻に集約された本書の味読は、この巨大な哲人の理解をいっそう容易ならしめよう。解説落合太郎。¥三八〇

明治文学史

中村光夫

明治革命期の混乱を経て、「前近代」から「近代」への目覚め、その文学的開花と対立など、はげしく変動した明治期の時代と文学を、鋭利な分析と透徹した理解力をもつて論証しつつ、併せて近代日本文学のもつ病根を明快に剔快する。卓抜した理論家としての著者の本領をしめす労作。 ¥三八〇

筑摩書房

¥ 380